

ごあいさつ

「家族が聞くー東京の戦争の話」開催にあたって

昭和 20 年（1945 年）3 月 10 日未明、焼夷弾による大規模な空襲が東京の下町部を中心に行われ、多数の死傷者を出しました。先の戦争が終わってから今年で 74 年が経ち、戦争を体験した人々が少なくなっていくことは、体験者の声を介した、世代を超えた語り継ぎの機会がなくなっていくことでもあります。今回私たちが耳を傾けたのは、今から 74 年前に東京大空襲に遭い、その後も東京で暮らし続けた体験者を含む、家族の間の「語り」です。

私たちのもっとも身近な語り継ぎの場のひとつに、家庭という場所があります。そこでは、自分が生まれる前の時代や出来事について語られたことがある一方で、近い間柄だからこそ話せなかったことや、知りたくても聞けなかったことがあるかもしれません。家族の間で戦争体験はどのように語られ、聞かれてきたのでしょうか。また、何が語られず、聞きこぼされてきたのでしょうか。74 年の月日を経てなお、いまだ声にならない語りを「聞く」ために、家族の外の聞き手ができることはあるのでしょうか。

本展は、とある東京大空襲体験者の子と孫と企画者が「いまあらためて何を聞きたいか」を話し合い、体験者本人へのインタビューをし、子や孫が語り直しを行うことで、新たな語りの生成の実践と、家族内継承という営みの検証を試み、これからの時代の“継承”について鑑賞者とともに思考を深めるものです。

そこかしこで生まれては消えていく、遠くて近い無数の語りを聞く「耳」をもつ。

本企画の試みが、皆さまのこれからの「聞く」という営みの一助になれば幸いです。

2019 年 9 月 かたつむり+NOOK

かたつむり

2018 年度に NOOK がナビゲーターを務めた Tokyo Art Research Lab 思考と技術と対話の学校 東京プロジェクトスタディ 4「部屋しかないところからラボを建てる：知らないだれかの話を聞きに行く、チームで思考する」参加メンバーの集まり。職業も関心もばらばらで、長い時間の雑談が得意。人の話を聞く「耳」の蝸牛のかたちがかたつむりに似ていること、活動として「かた」る、「つ」どう、「む」かう、「り」サーチすることから名付けた。本展はスタディのなかで出会った、東京空襲を記録する会の早乙女勝元氏の語りに何かしらの応答がしたいという思いを発端に企画された。

一般社団法人 NOOK

2015 年仙台市を拠点に設立された、土地と協働しながら記録をつくる組織。メンバーはアーティスト、研究者、プロデューサーなどで、さまざまなメディアを活用しながら、調査・記録・制作を行い、社会の中で「ドキュメンテーション」を実践している。本企画にはメンバーの中から瀬尾夏美、小森はるか、磯崎末菜が携わっている。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京／企画運営：かたつむり+一般社団法人 NOOK

本企画は Tokyo Art Research Lab 研究・開発 アセンブル1「厄災と向き合う術（すべ）としてのアート」の一環で実施しています。

加瀬家ご紹介

本展は、かたつむりメンバーの柳河が以前から親交があった、
12歳で東京大空襲を経験した加瀬泰子さん、息子の俊一さん、孫の祐希さんとともに進んでいく



加瀬 泰子 | かせ やすこ (中央)

昭和7年(1932)年生まれ。東京都墨田区出身、台東区在住。6人兄弟の長女。外手国民学校に入学後、小学6年生で千葉県に疎開。中学受験のため一時帰省していた時に、文京区本郷で東京大空襲を経験。再疎開先の栃木県山間部で終戦を迎える。青山学院大学に入学、卒業後は英語に関わる出版社に勤務。退社後、自動車部品卸の家業を継ぎ、傍ら自宅で英会話教室を開く。地元の学校で戦争体験を語ることも数度あった。

加瀬 俊一 | かせ しゅんいち (右)

昭和35(1960)年生まれ。東京都台東区出身、在住。泰子さんの長男。旧練成中学校(現在はアーツ千代田3331)卒業。大学卒業後、ファッション・デザイン関係の職に就く。現在は趣味のバンド活動も行う。

加瀬 祐希 | かせ ゆうき (左)

平成2年(1990年)生まれ。東京都台東区出身、在住。俊一さんの長女で、泰子さんの孫。美術大学卒業後、児童館職員などを経て、現在はデザイン会社に勤務。

家族に聞くための手法

本展では、家庭内における語り継ぎの可能性を探るために、戦争体験者（今回は泰子さん）とその子・孫への聞き取りを次のプロセスで行った

① 企画者が、泰子さんの子・孫へのヒアリングを行う

これまで家庭のなかで子・孫が「何を聞いてきたか」「あらためてどんなことを知りたいか」をヒアリングし、企画者が祖母に対する質問票を作成する。

② 子・孫が、泰子さんへのインタビューを行う

子・孫が質問票を使い、泰子さんにインタビューを行う（戦争体験の継承の場をつくる）。企画者が立ち会い、映像や写真、テキストで、その場の記録をする。

③ 泰子さんのインタビュー後に、彼女の戦争体験を子・孫が語り直す

インタビューで聞き取った泰子さんの体験を子・孫が企画者に対して語り直しを行い、その様子を映像で記録する（語りを引き受ける試みによって、継承の始まりをうながす）。

*この一連のプロセスに並行して、「聞き手」となる企画者は、戦争体験を聞き取るための資料収集やリサーチ、語りの検証などを行いました。

①2019年8月27日

俊一さんと祐希さんにお話を伺い、
質問票を作成

②2019年9月15日（午前）

質問票をもとに、俊一さんと祐希さんが
聞き手となり、泰子さんのお話を伺う

③2019年9月15日（午後）

泰子さんに聞いた話を
俊一さんと祐希さんが語り直す

- 戦争中はどんな家族構成で暮らしていましたか？
- 康子さんのお父さんのことを教えてください
- 康子さんのお母さんのことを教えてください
- 東京大空襲の当日のことを教えてください
実際の避難経路はどのようなものですか
なぜその経路で逃げようと思ったのですか
なぜ書類を持って逃げようと思いましたか
- 自宅の様子はいつわかりましたか？
家の再建はどのように進んだか
- 終戦が終わったとき、どんな気持ちでしたか
- “戦後”で印象に残っていることを教えてください
- 未来へのメッセージがあればお願いします
- 自分の子や孫に対する思いを聞かせてください



①企画者が、泰子さんの子・孫へのヒアリングを行う

俊一さんと祐希さんに、「泰子さんとの関係性」「自身が覚えている泰子さんの戦争体験」についてお話を伺い、「あらためて泰子さんに聞きたいこと」を話しあった
このヒアリングをもとに、のちのインタビューに使用する質問票を作成した

祐希さん（孫）と泰子さんについてのメモ

<泰子さんとの関係>

- ・ 2歳の時に祖母たちの家でしばらく過ごした経験があり、当時からよく話を聞いていた
- ・ 祖母が仕事で配達に行く時に、車と一緒に乗っていると、「(空襲の時)ここを逃げたんだよ」「(戦時中は)ここに軍事施設があった」など話題にあがった
- ・ 日常的に祖母の人生史で重要なエピソード(戦争以外のことも)を繰り返し聞いてきたので、今さら聞くことがないかも?
- ・ 祖母も私も長女なので、「しっかりしてほしい」という願いを込めて話していたのかもと思う

<祐希さんが記憶している泰子さんの戦争体験>

小学校高学年の時に東京大空襲に遭った。兄弟がたくさんいて、父親から「何かあったら家を守りなさい」「家業に関わる書類一式を背負って逃げなさい」と言われていたため、いざ空襲が来た時には家族を引き連れて、書類を背負って逃げた。後樂園の坂を上がり、途中にあった学校の施設に逃げ込んだ。

祖母の父親は新しい考え方の人で、祖母に子供の頃から英語を勉強させたし、当時珍しく女でも大学に進学させてくれて、仕事を持つことも進めた。だから愛国主義とかそういう考えがなかったのかもしれない。

<泰子さんに聞きたいこと>

祖母自身の話はよく聞くので、祖父や曾祖父のことを聞いてみたい。

俊一さん（息子）と泰子さんについてのメモ

<泰子さんとの関係>

- ・母の人生史のエピソードとして、戦争体験も断片的に話を聞いてきた
- ・母が話す時には、大変な戦争をいかに自分が切り抜けてきたかということにポイントがあり、それ以外のことはそんなに語られていないと思う

俊一さんが記憶している泰子さんの戦争にまつわる体験>

空襲の話は大体娘が覚えているのと一緒にだが、書類一式を持って逃げたのは母自身の判断だと聞いていた。母の父親が大阪に出張している時に空襲があったので、自分で判断して書類を持って逃げたことを、のちに褒められたと聞いた。

疎開先は那須かどこか。当時のエピソードとして、お世話係の若いお姉さんが、子供たちをどこかに引率した帰り道で「近道しよう」と持ちかけて、覗き込んだらるか谷底が見える鉄橋を渡らせられた、という話をよく聞いた。みんな無事だったけど、結局そのお姉さんはクビになってしまったそう。

父は学徒動員で死体片付けをずっとやらされていたということも母に聞いた。寡黙な父だったが、母がよく喋る人なため、つられて父も喋ったのかもしれない。

また、母の父親は身長が足りなくて戦争に引っ張られなかったとも聞いた。

<泰子さんに聞きたいこと>

なぜ空襲が来たという緊急時に、生き残る道を選ぶ判断ができたのか聞いてみたい。野生の勘と言われたらそれまでだけど、風を読むとか地形がわかるとか、何かあったのなら知りたい。